

# 回遊型観光地における参加型まちづくりに関わる観光客と居住者の意識の違い\*

## A Study on the Difference of Attitudes toward Living Streets between Visitors and Residents \*

橋本成仁\*\*・伊豆原浩二\*\*\*・五味川裕明\*\*\*\*

By Seiji HASHIMOTO\*\*・Koji IZUHARA\*\*\*・Hiroaki GOMIKAWA\*\*\*\*

### 1. はじめに

歩いて街並みなどを楽しむ回遊型の観光地にとって、観光客が楽しめる空間を提供することは非常に重要な要件である。特に歴史的な街並みなどをウリにした地域にとっては、その雰囲気を壊さずに残していくことが地域の整備における前提条件となる。

ただし、その地域で生活するものにとっては、日常的な生活空間としての安全性・快適性も犠牲にたくない要素であり、観光客の意識と居住者の意識の間でどのように折り合いをつけるのかが、このような地域におけるまちづくりのポイントとなる。

地域が面的な広がりをもつ場合、安全対策としてコミュニティ・ゾーン<sup>1)</sup>、くらしのみちゾーン、あんしん歩行エリアなどの地区交通安全対策が各地で進められている。これらの事業では主として日常的な生活空間における安全性・生活環境の向上が主な目的とされ、住宅地域やその周辺の商業地域での導入が進められ<sup>2)</sup>、大きな効果が示されている<sup>3)4)</sup>。これらの整備事例においては、対象となる地域の居住者（・商業者）が計画づくりに当事者として参加し、計画を作成していくこととなる。

しかし、住民参加型の計画づくりにおいては、観光客の意見を反映することが困難であり、観光協会や事業者からの間接的な意見を観光客の意識として組み込む計画になりがちで、実際の観光客から見た視点が十分に反映されるかどうか不明な部分がある。また、対策を打つべきニーズについても観光客と居住者で同じ傾向となっているかどうか不明な部分が多く存在する。

本論文では岐阜県郡上市八幡地区を対象地域とし、観光客と居住者での地域内の道路空間に求める機能に違い

が見られるか、また、住民参加型の取り組みで観光客に求められる空間形成のための計画が策定できるのかについて検討することとする。

### 2. 対象地域の概要

対象地域は、郡上市八幡地区（旧郡上郡八幡町の中心部）の約84haであり、地区内の人口は平成16年5月末日現在で5,473人である。この地区には夏の郡上おどりとともに古い街並みなどを求め年間124万人余りの観光客が訪れている。とくに、中心市街地には街並み協定が結ばれており、観光客にとっては、魅力的な空間となっており、観光という視点を考慮した計画づくりが必須な地域である。



図-1 郡上市八幡地区の観光マップ



図-2 観光地内にも観光客・居住者の自動車が入る

\*キーワード：地区交通計画、観光地

\*\*正員、博（工）、豊田都市交通研究所

（愛知県豊田市若宮町1-1、

TEL0565-31-7543、E-mail：hashimoto@ttri.or.jp）

\*\*\*フェロー、博（工）、名古屋産業大学環境情報ビジネス学部

（愛知県尾張旭市新居町3255-5 TEL：0561-55-3011、

E-mail：izuhara@nagoya-su.ac.jp）

\*\*\*\*非会員、郡上市役所総務部

ただし、地域内では観光客の自動車も含め多数の車両が出入りしており、居住者及び観光客にとってより一層安心して歩行を楽しむ空間づくりが求められる状況となっている。

そこで、この地区であんしん歩行エリアを整備すべく、郡上市では地域住民とともに平成16年以降計画づくりを進めている。

### 3. 調査の概要

本研究においては、居住者と観光客を対象とした表-1のようなアンケート調査を実施し、それぞれが地域の道路空間に求める機能の違いについて検討した。

また、観光客と居住者で安全上問題であると考えられるポイントに相違があるかどうかについても検討した。

表-1 アンケート調査の概要

観光客意識調査	
対象者	観光客（個人・団体）
配布・回収方式	調査員による聞き取り調査
回答者数	104名
調査日	2005年11月23日
居住者意識調査	
対象者	あんしん歩行エリア対象地区の居住者
配布・回収方式	町会を通じての配布回収
配布数・回収数	配布：1148世帯 回収：754世帯1299名
調査時期	2006年3月

### 4. 調査結果

#### (1) あんしん歩行エリア居住者の観光に関する意識

自分たちの居住地域が歴史的な街並みをウリにした観光地であることを背景に、あんしん歩行エリア内の居住者がまちづくりに対してどのような意識を持っているか？また、生活空間内に観光客が入ってくることにに対してどのように感じているかについてまとめたものが以下の図-3～図-5である。

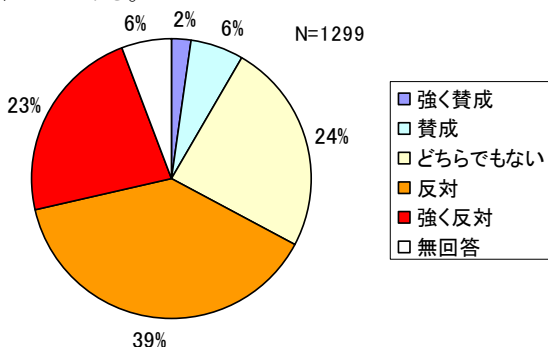


図-3 観光客に楽しんでもらえるまちづくりは重要である

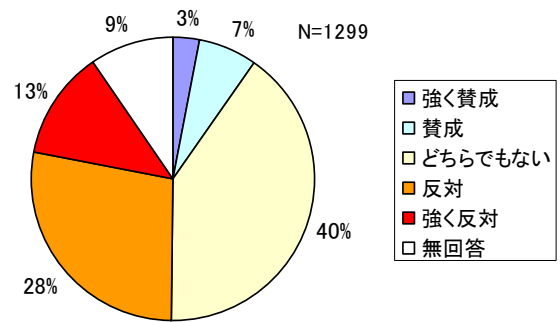


図-4 個人の住宅であっても、古い街並みと調和を重視した外観にすべきである

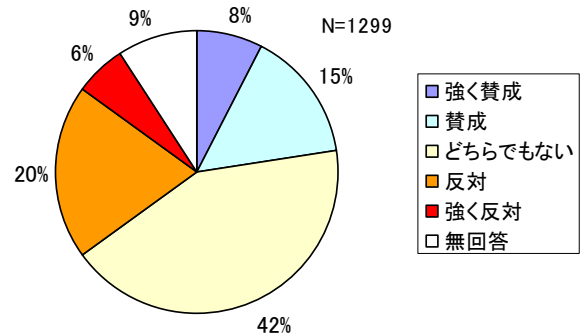


図-5 観光客が住宅地の中の街路を歩き回る

これらの結果からは、この地域に居住する居住者にとって、観光地であるということ意識したまちづくり、景観整備についての意識は必ずしも高くないことが明らかになった。また、歩行による回遊型の観光地ではあるが、観光客が生活空間内を歩き回ることにしても賛成・反対がそれぞれ1/4程度存在していることが明らかになった。

これは、この地域の多くの居住者が観光産業に従事しているわけではないことから、日常生活の場に観光客が存在していることが必ずしも歓迎されているわけではないことを示している。

#### (2) あんしん歩行エリア居住者の自動車交通・駐車に関する意識

図-6～図-8は当該地区の居住者の自動車での移動及び駐車に関する意識を示したものである。

この地域の特徴ともなっている幅員の狭い街路が多数存在する（図-9）道路事情を反映してか「車で全ての家の前までたどり着けること」については「まったく必要ない」「必要ない」と答えた回答者が合わせて約4割に達している。また、駐車についても、「自宅前に自分の車が駐車できること」が重要であるとする回答者は約16%に過ぎない。

ただし、「観光客の車が地区内を通り抜けないこと」に関しては、「非常に重要」「重要」が合わせて14%に過ぎず、「まったく必要ない」「必要ない」が合わせて

31%、「どちらでも良い」も4割となるなど、観光客の車に関しては容認とも考えられる結果となっている。

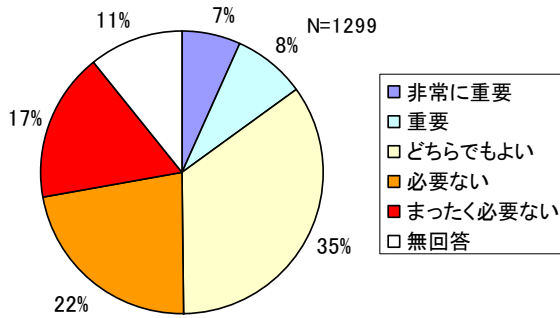


図-6 車で全ての家の前までたどり着けること

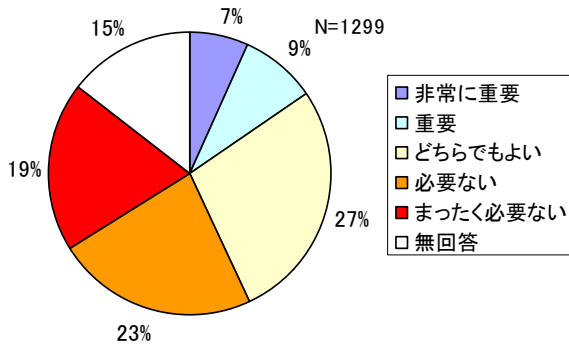


図-7 自宅の前に自分の車が駐車できること

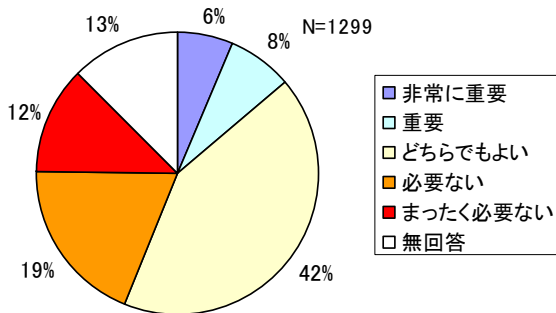


図-8 地区で住んでない観光客の車が、通り抜けにくいこと



図-9 対象エリア内住宅地の道路

幅員が狭く路上駐車しにくいこともあり、路外駐車場が活用されている

### (3) 居住者と観光客の道路空間に関する意識の比較

図-10、図-11はあんしん歩行エリア内の道路空間に関する意識を居住者と観光客の別にまとめたものである。

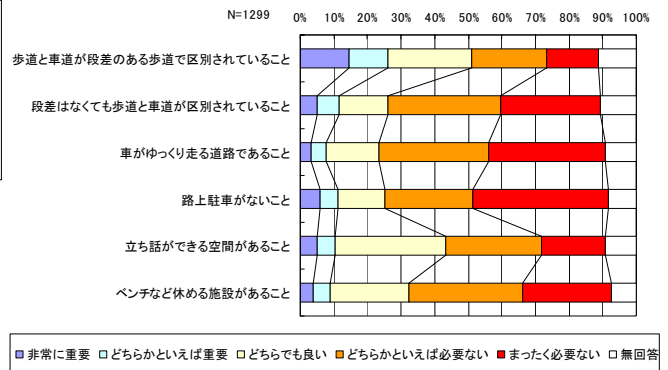


図-10 居住者の道路空間に対する意識

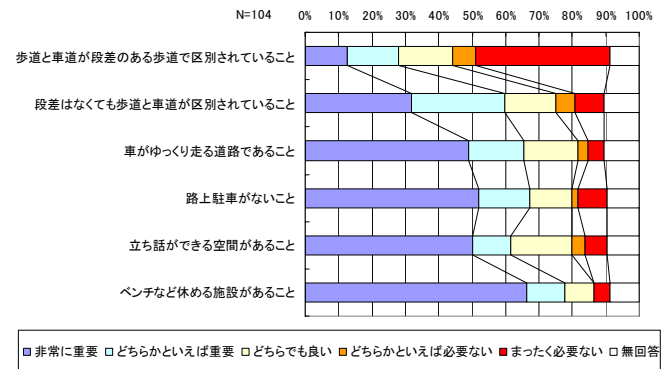


図-11 観光客の道路空間に対する意識

これらのグラフから明らかなように、居住者と観光客とでは、道路空間に求めているものが全く異なっている。

「歩道と車道が段差のある歩道で区別されていること」については、観光客では、まったく必要ないという回答が非常に多くなっているが、居住者側では比較的低い値となっている。

「段差はなくても歩道と車道が区別されていること」という項目については、居住者側では「まったく必要ない」「どちらかといえば必要ない」が合わせて6割以上を占めているが、観光客は「非常に重要」「どちらかといえば重要」で約6割となっており、正反対の結果となっている。

同様に、「車がゆっくり走る道路であること」「路上駐車がないこと」「立ち話ができる空間があること」「ベンチなど休める空間があること」などの各項目についても、居住者と観光客とでは大きく意識が異なることが明らかになった。

### 5. 住民参加型まちづくりに関する検討

以上のような居住者と観光客の意識の差異は、安全に

ゆっくり観光を楽しみたいと考えている観光客と日常生活における利便性を追求している居住者の間の意識のギャップに起因すると考えられる。

ここで問題となるのは、あんしん歩行エリアなどの住民参加型で計画づくりを行う事業が観光地における計画づくりにおいても有効であるかという点である。

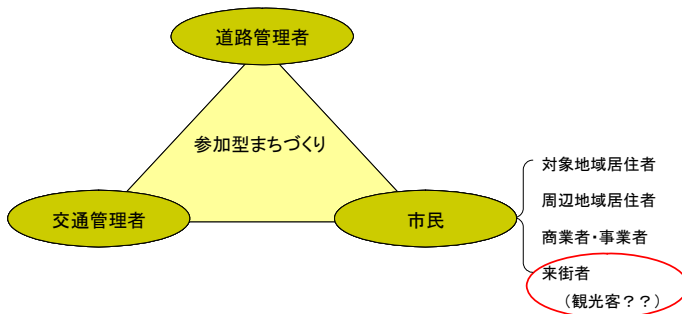


図-12 市民参加型まちづくりの概念図

図-12は参加型まちづくりにおいて市民と道路管理者、交通管理者がともに協力して計画づくりを行うことを示す概念図である。参加型のまちづくりにおいては、どの範囲の市民までを対象に参加を募るかということが実務上の課題として常に挙げられるが、この中の「市民」に来街者、特に観光客が含まれるかどうかがこの論点となる。

観光客などは現実問題としてワークショップなどの議論の場に定期的に参加が非常に困難であるため、その意見を直接取り入れることは非現実的である。

そこで、一般的なワークショップの形態である地域の居住者のみによる検討体制で、観光客の意見も包含した計画づくりが可能かどうかここでの焦点となる。下の図-13はあんしん歩行エリアの検討において作成された居住者の視点から見た交通安全上の危険地点と観光客から見た危険地点を比較したものである。サンプル数が異なるため、居住者が最も多く指摘した地点の○印の

大きさを揃えて観光客の危険地点図を作成している。

これによると、①観光客が指摘した地点はほぼ全て居住者が指摘した地点に含まれているが、②指摘が集中した地点は観光客と居住者で異なっていることが分かった。

当然、観光客が回遊する経路と居住者が日常生活でよく利用する経路が異なるため、指摘集中地点が異なると考えられるが、十分な参加者数を得ることができれば、少なくとも地点として観光客が危険と感じるポイントは居住者によるワークショップにおいて抽出することが可能であると考えられる。

ただし、4. の(3)で示したように、居住者と観光客の道路に対する価値観があまりにも異なっている場合、居住者のみによる検討で、どこまで観光客が満足する計画を作成できるかについては疑問が残る。この点についてはより詳細に検討したい。

## 6. まとめ

本論文では、岐阜県郡上市八幡地区を対象に、観光地における観光客と居住者の意識の違いについて調査し、その意識に非常に大きな違いがあることを確認した。

このような意識の違いがある場合に、市民参加型でまちづくりの計画策定を行うことについては、観光客の意識をどの様に収集・計画反映するかが大きな課題であると考えられる。この点については更に検討を進めたい。

## 参考文献

- 1) 交通工学研究会：コミュニティ・ゾーン形成マニュアル，1996。
- 2) 交通工学研究会：コミュニティ・ゾーン実践マニュアル，2000。
- 3) 交通工学研究会：コミュニティ・ゾーンの評価と今後の地区交通安全，2004。
- 4) 橋本，坂本，的場，高宮：三鷹市コミュニティ・ゾーンの供用後評価，第19回交通工学研究発表会論文報告集，pp.209-212，1999。

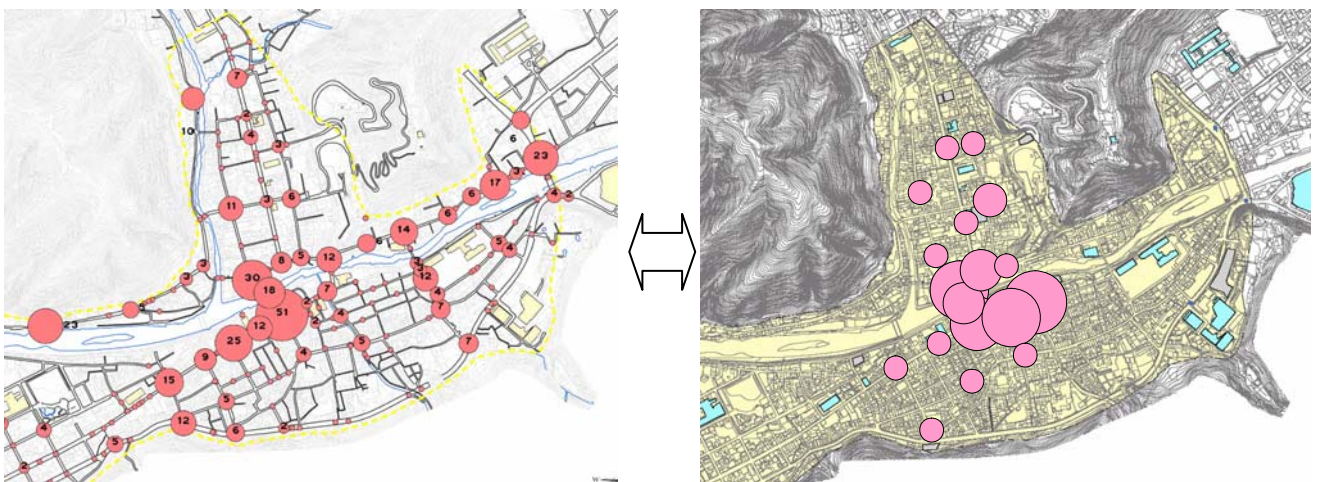


図-13 居住者の指摘した危険地点（左）と、観光客が指摘した危険地点（右）